

行為としての沈黙の分類

— 会話に生じる沈黙の再考に向けて —

Reconsideration of Silence in Conversation: Toward a Typology of Silence as Pragmatic Acts

種市 瑛

Akira TANEICHI

Abstract: This paper has two aims: (1) to construct a classification scheme for the analysis of silence in conversation, reflecting not only the turn-taking function but also other effects stemming from the interaction between the speaker and the silent person; and (2) to examine the ambiguity of the interpretation of the silence.

Silence is often said to be an important cue for turn-taking in communicative interactions. In addition, recent studies note that silence is also a means for a participant in an interaction to convey his or her intentions and emotions to others. Silent acts such as these may be interpreted differently in accordance with the perspectives they are viewed from by speakers and silent persons.

In spite of the communicative multifunctionality of silence, the major studies that attempt to classify its functions focus on turn-taking. Moreover, these previous efforts tend to define silence as a communicative act on the part of a single actor or “speaker.” Therefore, traditional categories seem too limited to fully analyze silent acts in communicative interactions.

This paper attempts to claim that to examine acts of silence in conversation, we need to reconsider how these acts function in communicative contexts as interactions between interlocutors, not just acts of a speaker alone. Based on this critical reconsideration, it presents (a) a new typology of silence including both the kinds of silence identified by previous studies and also two newly identified silent acts, called “mute” and “lingerer”; and (b) a detailed sample analysis indicating that the acts of silences may be interpreted in several ways in interaction.

1. はじめに

一般的に沈黙は、発話や音と対比されることが多い行為であり (Verschueren, 1985)、コミュニケーションのない状態や休止を表すと認識されている (Jaworski, 1997)。しかしながらじっさいには、沈黙は発話と同様にコミュニケーションのなかで多様な役割を担っているため、発話に類似した行為であると考えられる。そのため、沈黙と発話の境界は非常に曖昧であり、明確に分けられるものではない (Jaworski, 1997)。

沈黙は発話の不在ゆえに、すべてが同じ形式をもつ同様の現象のように見えるため、沈黙による意図や感情の伝達は、非常に間接的な表現行為である。表現行為としての沈黙は、社会や文化により、異なる解釈を生み出す多義的な行為として解釈される (Mey, 2001)。そのような沈黙行為の解釈に見られる多義性は、沈黙によって伝えられる意味の問題だけではなく、沈黙が会話参加者の誰に属するののかという行為者の問題とも関連すると考えられる。

本稿では、会話中に生じる沈黙が、誰による行為としてとらえることが可能なかの枠組みを検討することを目的とする。沈黙を行為としてとらえ、その解釈が多義的であることを考慮したうえで、沈黙者の分類を検討することにより、会話に生じる沈黙のふるまいを理解する一助となると考えられる。

2. 会話中に生じる沈黙の分類

先行研究に従えば、会話における沈黙を会話参加者がどのように扱うかは、その沈黙がどのような位置に出現したかに依存していると考えられている (Sacks, Schegloff & Jefferson, 1974, p.715)。以下では、Sacks, Schegloff & Jefferson (1974) および Levinson (1983) が提示した4種類の沈黙、すなわち「ポーズ (pause)」、「ギャップ (gap)」、「ラプス (lapse)」、「意識的/限定的沈黙 (significant / attributable silence)」について述べる¹。

第一にポーズとは、同一話者の発話間に生じる沈黙をさす² (Sacks, Schegloff & Jefferson, 1974, p.715)。ポーズは、ターンの途中や、ターンを一度終わらせたものの、再度、自らターンを取得した際に生じる (Sacks, Schegloff & Jefferson, 1974, p.715)。このような沈黙は、たとえば発話を文法や韻律などの単位毎に区切る際や (Brown & Yule, 1983; Jaworski, 1993)、また会話参加者に対して発話の理解をうながすときに観察される (杉藤, 1991)。そのためポーズは、ターンを保持している者により、沈黙が行われたとして解釈することができる。

以下に Sacks, Schegloff & Jefferson (1974) により、示されたポーズの事例を提示する。本スクリプトにおける会話参加者は Roger (以下、R)、Louise (以下、L) の2名である。

スクリプト1 ポーズ

- 1 R: That's a joke that police force. They gotta hundred cops around the guy
 2 en so(h)me guy walks in and says I'm gonna shoot you and shoots him.
 3 R: :hhmhhh heh
 4 R: En it's the president's assassin y' know,
 → 5 (0.9)
 6 R: They're wonder[ful].
 7 L: [Hm- Now they're not even sure.

(Sacks, Schegloff & Jefferson, 1974, p.704)

Sacks, Schegloff & Jefferson (1974, p.715) によると、5行目に見られる沈黙はポーズであるとされる。1-4行目にかけてRは、次話者に「発言権 (floor)」を取らせる間を与えず発話し、そのままターンを終えた。したがって直後の5行目では、RとLの両方が発言権を得てもよい状態となっている。だがじっさいには、発言を行う会話参加者はなく、沈黙が生じた(5行目)。沈黙が生じていたあいだ、Lはいつでも話し始めることが可能であったが、それは行われなかった。その事態を受け、続く6行目でRは、再び自らターンを取り、発話を開始した。すなわち5行目に生じた沈黙の前後の発話者は、Rとなった。このことからこの沈黙は、同一話者の発話間に生じたものとみなされるため、ポーズであると同定される。

つぎに、意味をもつ文法的区切れや抑揚により「話者交替 (turn-taking)」が現れうる「移行適格場所 (transition relevance place)」に起こる沈黙を、ギャップという³(Sacks, Schegloff & Jefferson, 1974, p.715)。ギャップは、現在の話し手がつぎの話者を指名せずにターンを終わらせ、聞き手が自らターンを取る際に現れる (Sacks, Schegloff & Jefferson, 1974, p.715)。ギャップが生じた際、会話参加者のうち、誰でもつぎに話すことで沈黙を埋めることができる。したがってこのような沈黙は、誰にも属さないものであるとされている。そのうえ、このようなギャップは、会話において最小化されなければならないと考えられている (Sacks, Schegloff & Jefferson, 1974, p.715)。

Sacks, Schegloff & Jefferson (1974) に掲載された事例をもとに、ギャップの説明を行う。なお、以下のスクリプトに登場する会話参加者は、Sara (以下、S)、Ben (以下、Be)、Bill (以下、Bi)、の3名である。

スクリプト2 ギャップ⁴

- 1 S: Ben you want some ()?
- 2 Be: Well allright I'll have a,
- 3 ((gap))
- 4 S: Bill you want some?
- 5 Bi: No,

(Sacks, Schegloff & Jefferson, 1974, p.703)

1行目にてSは、Be に対し質問を行い、それを受け Be は、2行目で返答を行った。その際、Be は次話者を指名することなくターンを終了させた(2行目)。そのため、続く3行目では、次話者として選択された人がいないため、Be が発話を再開してもよく、またその他の会話参加者が話し始めることもできる状況である。すなわち、3行目は、つぎに自らの意思で話し始めた人が次話者となることを指標している隙間のようなものであり、誰に属しているとはいえないものである。そこに生じた沈黙は、上記の理由ゆえに話者交替の行われるためのギャップであると考えられる。その後、S が再び、自らターンを取り、Bi へ質問を行うことで、3行目に生じたギャップの最小化を図った(4行目)。以上のことから、3行目に生じた沈黙は、会話参加者が誰でも発言できるように起こり、それが話者交替のきっかけとなる沈黙で、誰にも帰属しないものであることから、ギャップであるとされる。

加えて、ギャップのなかでもとくに発言権を求めず、その後続く発話のない沈黙を、ラプス

という⁵(Sacks, Schegloff & Jefferson, 1974, p.715)。すなわちラプスは、現在の話者が次話者を指名せず、また現在の話者が発話を終えたものの、続けて誰も発言権を取ろうとしない際に生じる沈黙をさす (Levinson, 1983, pp.298-299)。そのためラプスは、誰にも属さない沈黙であるといえる。

以下のスクリプトは、Sacks, Schegloff & Jefferson (1974) により提示された、ラプスが生じたとされる J と C によるやり取りの一部である。

スクリプト 3 ラプス

- 1 J: Oh I could drive if you want me to.
 - 2 C: Well no I'll drive (I don't m//in?)
 - 3 J: hhh
 - 4 (1.0)
 - 5 J: I meant to offah.
 - 6 (16.0)
 - 7 J: Those shoes look nice when you keep on putting stuff on 'em.
 - 8 C: Yeah I 'ave to get another can cuz it ran out.
- ((以下、省略))

(Sacks, Schegloff & Jefferson, 1974, p.714)

Sacks, Schegloff & Jefferson (1974, pp.714-715) に従い、6行目に生じた沈黙の解釈の説明をすると、以下のとおりとなる。1-3行目まで、次話者を選択しないかたちで TRP にて発話を止めることや (1行目)、次話者を選択したうえで TRP にて発話を終わらせることで (2行目)、J と C のあいだでターンの移行が行われている。しかしながら 3行目にて J が、C を次話者として選択をすることもなく、笑いだけのターンを構成した。そのため 4行目では、J と C のいずれもが発話することが可能な状態であるまま、沈黙が生じた。沈黙が 1秒間生じたのちに、J は C が話さないことから、再び発話を行った (5行目)。この 5行目の発話に注目すると J は、C を次話者として選択することなく、発話を終えていることがわかる。したがって続く 6行目は、C が自ら発言権を取り、発話することが可能であり、また J も再び話し始めることができる行となっている。だがじっさいには、両者が発言を行うことがなかったため、16秒におよぶ沈黙が生じた (6行目)。つまりこの行における沈黙は、会話参加者のいずれもが発言権を取らなかったために生じたラプスであると述べている⁶。

最後に、現在の話し手が発話を止めたあとに、指名された⁷つぎの話し手がターンを取るまでに生まれる沈黙は、意識的/限定的沈黙と呼ばれる (Levinson, 1983, p.299)。意識的/限定的沈黙は、次話者として指名された話し手が何かしらの理由により、あえて発話を開始しない状態であると解釈されるため、指名された話し手に属すると考えられている (山田, 1999, p.10)。

意識的/限定的沈黙の事例は、以下のとおりである。C と R のやり取りをもとに、2行目に見られる沈黙について、説明を行う。

スクリプト 4 意識的/限定的沈黙

- 1 C: ...I wondered if you could phone the vicar so that we could
- 2 ((in-breath)) do the final on Saturday (0.8) morning o:r(.)afternoon or

- 3 (3.0)
 4 R: Yeah you see I'll I'll phone him up and see if there's any time free
 5 (2.0)
 6 C: Yeah
 7 R: Uh they're normally booked Saturdays but I don't- it might not be
 (Levinson, 1983, p.337)

Levinson (1983) による説明をもとに、以下に沈黙の解釈を記す。1-2 行目にて C は、R に対して依頼を遂行する発話を行っている。したがって、続く 3 行目は、R による依頼の承諾、または拒否の返答がなされることが期待される。つまり、この行における発言権は、R にあるといえる。しかしながら、R からの返答はすぐには来ず、3 秒の沈黙が生じた (3 行目)。3 秒の沈黙ののちに R は、C に対し、1-2 行目の依頼に対する返事を行っている。すなわち 3 行目における沈黙は、R による返答の遅れによって生じた意識的／限定的沈黙であると考えられる。

先行研究において提示されたこれらの沈黙の分類では、(1) 沈黙の生じた前後の発話者が誰か、および (2) 沈黙直前の発話でどのような形式が用いられ、ターンが移動したのか、という二つの点に焦点がおかれている。つまり、これらの分類では、「話者交替」という現象を解明するための手がかりとしての沈黙が、分類されていると考えられる。

しかしながら、じっさいの会話を観察すれば、沈黙は話者交替だけでなく、沈黙者の意図や感情を表現する手段にもなりえていると思われる。先行研究による沈黙の分類は、沈黙者の存在や、沈黙そのものによる行為の遂行という視点が反映されておらず、そのため、相互行為に見られる沈黙の側面しかとらえていないといえるだろう。今後、沈黙者による意図や感情の伝達という視点を取り入れることで、相互行為に見られる沈黙をより精緻にとらえることが可能となるのではないだろうか。上記の点を踏まえ、現在の沈黙の分類において、新たに 2 種類の沈黙を追加することを、下記に提案する。

第一に、同一話者の発話内に沈黙が生じた際、そこには沈黙という聞き手によるターンが構成され、「言語行為 (speech act)⁸」として機能することがある⁹ (Nakane, 2007, p.6)。このような沈黙は、たとえば質問をしたものの、質問を受けた人が何も答えず、質問者が再度、発話を行うような場面に見られる。この場合、質問—返答という「隣接ペアー (adjacency pair)」の応答部分に沈黙という返答形式が用いられ、その沈黙には何かしらの意味、つまり「発語内効力 (illocutionary force)」が込められていると考えられる (Kurzon, 1998, p.25)。そのような沈黙は、聞き手とされる人による行為として解釈されるため、このような沈黙は、ポーズと区別される必要があると思われる。また Levinson (1983) は、このように隣接ペアーの応答部に見られる沈黙は、意識的／限定的沈黙であると述べている (pp.299-300)。だが、同一発話者間に見られ、聞き手とされる人による沈黙のターンは、隣接ペアーに限って観察されるものではない。そのため本稿では、このような沈黙の行為をより一般的なものとしてとらえるため、意識的／限定的沈黙とも区別し、「ミュート (mute)」と名づける。

第二に、現在の話者が発話を行ったのちに、話者交替が起きるまで引き続き沈黙によりターンを継続することもある。たとえば、話し手が聞き手に対し、語り難いことを伝えなければならない場合、発話に続く沈黙により、聞き手にその想いを察してもらおうとすることがある。そのような沈黙は、直前の話者が行った行為として理解されるため、ギャップと区別し、「リンガー (lingerer)」と名づける。

上記を踏まえ、図1では話者交替の視点による従来の分類に加えて、発話者と沈黙者による相互行為の視点を取り入れ、会話に生じる行為としての沈黙をより包括的にとらえることを試みた。このような分類によって、従来の話者交替に焦点が置かれた沈黙の分類を批判的に乗り越え、コミュニケーションにおける沈黙を表現行為としてとらえることの意義の再考につながると考えられる。

Aの発話	ポーズ (Aによる沈黙)	Aの発話
Aの発話	ギャップ (誰にも属さない)	Bの発話
Aの発話	ラプス (誰にも属さない)	Aの発話/Bの発話
Aの発話	意識的/限定的沈黙 (Bによる沈黙)	Bの発話
Aの発話	ミュート (Bによる沈黙)	Aの発話
Aの発話	リンガー (Aによる沈黙)	Bの発話

図1 行為としての沈黙の分類

なおこの分類は、会話中に生じる沈黙が誰によるものなのかの可能性を示すための枠組みであり、会話中に生じた沈黙を一義的に同定するためのものではない。ミュートやリンガーのように行為としての沈黙は、聞き手とされる人が意図的に行った沈黙、すなわち「意図的沈黙 (intentional silence)」(Kurzon, 1998) として想起されやすいかもしれない。しかし、そのような沈黙は、必ずしも意図的な行為であるとは限らず、会話参加者により、そのように解釈されただけの場合もありうる¹⁰。沈黙は、音声を伴わず、会話参加者による相互行為の結果として生じる行為である。そのため、どのような視点から沈黙をとらえるのかにより、会話参加者のあいだでも、解釈に揺れが生じる行為である。次章では、沈黙の解釈における多義性に焦点化し、上図に示した分類に従ってさらなる考察を展開する。

3. 沈黙の解釈にみられる多義性

ここでは、沈黙が会話中、どのような多義的ふるまいをするのかについて、前章で新たに提示した沈黙の分類を中心に事例を分析する。それぞれの事例は、20代前半の日本人女性2名の研究協力者が行った電話対話をデータとしている。研究協力者A(以下、Aと呼ぶ)は、フリーターとしてスーパーマーケットで働き、研究協力者B(以下、Bと記す)は、大学院の博士前期課程に所属する大学院生である。AとBは、まったく面識がなく、今回の研究協力度で初めて知り合った。事例の分析は、詳細に記述されたスクリプトをもとに行った。記号一覧は、註11にて示す。

(1) 事例 1

この事例は、課題に取り組む時に得意なものから行うか、苦手なものから始めるかについて、意見を交換しているところである。以下のスクリプトは、とくにレポートを作成するのに要する時間について話している場面の一部である。

スクリプト 5 レポート作成にかかる時間

- 1 A: でも嫌いな :- なんだろ,
 2 レポート (1.0) をやるのって凄く時間がかかるじゃないですか?
 → 3 (1.0)
 4 B: あ [: そうですね
 5 A: [あ (.) かかんないですか?
 6 そうするとたとえば資料集めもちょっと :- なんか,
 7 と - 手間取っちゃったりとかして, うまく文章がまとまんなかったりとかして -

3 行目にみられる 1 秒の沈黙については、二通りの解釈が可能だと思われる。

1) 返答の保留を伝える意識的／限定的沈黙

第一の解釈は、A から B へと話者交替が起きている際に生じた B による意識的／限定的沈黙というものである。1-2 行目にて A は、B に対しレポートの作成に時間がかかるかどうかについて質問を行った。したがって、続く 3 行目では、B が質問の返答を行うことが期待される。しかしながら、B は即座に返答を行わず、1 秒間の沈黙のあとに (3 行目)、返事を返した (4 行目)。すなわち 3 行目の沈黙は、B が返答を遅らせたために生じた、B に属する意識的／限定的沈黙であるととらえることができる。

4 行目に見られる B の返答に着目してみよう。この場面に見られる意識的／限定的沈黙は、A による質問の直後に位置し、B による返答を要求される場面に発生しているため、B による返答の保留、あるいは何らかの不同意の示唆として解釈される可能性があるだろう。しかしながら、それに続いて 4 行目で B が「あーそうですね」と同意を表明するターンを取っているため、3 行目の沈黙のやや否定的なニュアンスは、薄れている印象を与える。

以上のことから、このスクリプトに見られる沈黙は、質問の返答の遅れによって生じた B による意識的／限定的沈黙であると考えられる。この意識的／限定的沈黙は、質問に対する答えの遅れから、返答の保留、または不同意を示唆する意味合いをもつと思われる。

2) 不同意を伝えるミュート

第二の解釈は、この沈黙をミュートであるとするものである。4 行目の B の発話と 5 行目の A の発話はほぼ同時に近いかたちで、オーバーラップしている。このことから、A が B の発話を意識し、内容を聞き取ってから、5 行目で発話をしたとは考えにくい。むしろ A は、3 行目の沈黙に注目をし、5 行目の発話を開始したのではないだろうか。このように考えると、3 行目の沈黙は B による「沈黙の返答」、つまりミュートであると A が受けとっているといえるのではないだろうか。

2 行目と 5 行目の質問にあらわれる動詞のかたちに注目し、3 行目のミュートを解釈すると以下の分析が可能であると思われる。2 行目の「時間がかかる」という肯定形と 5 行目の「時間が

かかんない」という否定形のあいだにあるミュートは、レポート作成への二つの認識の違いを生み出す役割を担っていると考えられる。2行目でAは「時間がかかるじゃないですか」という相手の同意を求める形式を使うことにより、Bも自分と同様に時間をかけてレポートを作成する人なのではないかという認識を露呈している。しかしながらBが3行目でミュートを行ったため、Aは5行目では「あ、かかんないですか」という否定表現を用いて、Bのレポート作成への時間のかけ方について確認している。つまりBは短時間でレポートを作成できる人である可能性があるという考えにもとづいて、Aが5行目で尋ねているといえるだろう。

このことからAは、この場面のミュートを最初の質問に対するBによる不同意として解釈したとすることができる。最初の質問に対して「同意を得られない」と解釈したAは、Bは自分とは違い、短時間でレポートを仕上げる人であるかもしれないと理解したため、その後の質問ではその考え方を反映させて否定形を用いて質問したのではないだろうか。以上のことから、3行目のミュートはAにとってはBによる否定的見解の提示、あるいは不同意という解釈ができるものであったと考えられる¹²。

(2) 事例2

つぎの事例では、夏休みの予定について電話で話している会話に生じた沈黙をとりあげ、ギャップとリンガーという二通りの解釈の可能性について論じる。Aは、Bに夏休みの大半をアルバイトに費やすことを話したのちに、夏休みをどのように過ごすのかについて尋ねた。その質問に対してBは、夏祭りに行く予定があることをAに伝えた。以下の事例は、Bが夏祭りに参加することを知ったAが、それに対して発言を行う場面から始まる。

スクリプト6 お祭りへの参加

- 1 A: あ :: そっか ::, お祭りか, いいな .
 → 2 (2.0)
 3 B: いいですよね ::. なんかこうお祭りのなもの : とか (.) 行ったりします?
 4 この夏とか花火とか (0.8) ありますよね . あとなんか夏祭りのな -.

1) 話者交替のタイミングを測るギャップ

第一の解釈は、2行目に生じた2秒の沈黙がギャップであるとするものである。1行目の発話にてAは、次話者としてBを選択することなく、ターンを終えている。そのためつぎの行では、Bが自ら発言権を取り、発話をする 것도でき、またAが再び発話をする 것도可能である。2行目の沈黙は、そのような状況下で生じた。したがって、2行目の沈黙は、つぎに話し始めた人が次話者になることを示すものであり、誰にも属しているとは言えないものである。その結果、沈黙後の3-4行目では、Bが発言権を取り、発話を行った。そこに生じた沈黙は、以上の理由から話者交替が行われるためのギャップであると考えられる。

一般的に、ターンが移行するまでのあいだに生じる沈黙は短く、平均するとマイクロ秒 (microseconds) であるとされる (Jaworski, 1993, p.16)。しかしながら、この事例に見られるギャップは2秒であり、一般的な話者交替に要する時間よりも長く生じたといえる。このことから、AとBのあいだで、ターンのやり取りがうまくいかなかったと推察される。その理由として、AとBは初対面であり、また電話での会話ゆえに視覚情報が欠如していたため、話者交替のタイミングがわからなかったことが考えられる。そのためBは、1行目にてAがターン

を終わらせたものの、それが話者交替の合図なのかがわからず、話し始めるまでに時間を要したと考えられる。

このことから、この事例におけるギャップは、AとBの間で話者交替が円滑に行われなかったために生じたものであると解釈することが可能である。AとBがお互いの話者交替の仕方を理解しておらず、Aがギャップの直前に次話者を選択せずに発話を終えても、Bはそれが話者交替の合図であることをわからなかったために、ギャップが生じたといえるだろう。以上のことから、2秒にわたるギャップが生じたものと考えられる。

2) 羨みを表現するリンガー

この沈黙をAによる発話に続く沈黙の行為、すなわちリンガーとするのが、第二の解釈である。Aは1行目にて、お祭りに行くことを羨む発言をしている。その後、2秒の沈黙が生じたあとに(2行目)、Bはお祭りに行くことはよいことであると述べている(3行目)。

1行目に見られるAの「お祭りか、いいな」という発言に注目し、2行目のリンガーをとらえると、以下の解釈が可能となるだろう。Bは、夏祭りに行くことを予定し、それを楽しみにしていたことを、Aに伝えた。だがAは、夏休み明けに海外旅行に行くことを予定していたため、夏休みの大半をアルバイトに費やすことで、お金を貯める予定であった。そのため、お祭りに行くことなど考えていなかったAにとって、夏祭りに行くという予定は、憧れのことであったと推察される。またAとBは、今回の研究協力を通して知り合った関係であり、気兼ねなく気持ちなどを伝えられる関係であるとは言い難い。そのため、Bへの羨ましいという感情を強く主張することは、BがもつAの印象を悪くする恐れがあると考えられる。したがってAは、Bが夏祭りに行くことに対し、控えめに「お祭りか、いいな」(1行目)と発言することで、Bへの羨ましい気持ちを表現したのではないだろうか。しかし、Bへの羨みの気持ちを満足に表現できていないAは、2行目にて沈黙をすることで、その気持ちをBに察してもらおうと試みたと考えられる。その気持ちを汲んだBは、3行目にて「(夏祭りに行くことは) いいですよー」と述べた。なおBは、Aが夏休みにアルバイトをして過ごす予定であることは知っていた。しかしながらこの時点においてBは、海外旅行に行くためのお金を稼ぐことがアルバイトの目的であることは知らなかった。そのため、Aがなぜ夏祭りに行くことを羨ましがっているのかが理解できなかったBは、続けてお祭りや花火に行く予定がないのかを、Aに尋ねたと思われる(3-4行目)。

以上のことから2行目に生じた沈黙は、Aによる羨みを表現するためのリンガーであったといえるだろう。アルバイトをして夏を過ごす予定であるAは、夏祭りに参加するBを羨ましく思い、その気持ちをリンガーによって伝達しようとしたと考えられる。

4. 考察

上記では、新たに提示した沈黙の分類を用い、沈黙がどのようなふるまいをするのかについての事例分析を行った。従来の話者交替の視点に加え、発話者と沈黙者の相互行為の視点も踏まえた複合的な視点から構成された新たな分類を用い、事例の分析を行ったことにより、沈黙の解釈の幅が広がったと考えられる。本稿で扱った事例では、沈黙の解釈に見られる多義性は、沈黙により伝達される意味に加え、沈黙が会話参加者の誰に属するのかという行為者にも見られた。このような解釈の多義性は、沈黙という行為をとらえる視点の違いによって生じるものであるとい

える。

話者交替の視点による沈黙の解釈では、発話者がことばによって円滑に会話を進めるという観点に焦点がおかれている。したがって、発話者が沈黙という行為をどのようにとらえているのかという点が、強調されていると考えられる。また、この視点では、沈黙が生じた前後における発言権のやり取りによって、沈黙者が解釈されている。そのため、沈黙者の解釈が一義的になされていることが特徴である。

一方、発話者と沈黙者による相互行為の視点から沈黙をとらえると、話者交替を円滑にする役割だけでなく、沈黙者の意図や感情を伝達する機能も強調される。このような行為として機能する沈黙は、直前や直後の発話に付随しながら遂行されることもあり、また沈黙だけでなされる場合もある。相互行為という視点を取ることで、沈黙の解釈に対する多義性を積極的に容認できることになり、より説得力があり現実に即した分析を行うことができると思われる。換言するならば、同一の沈黙であっても、その行為の解釈は多義的であり、それぞれの解釈は共起するものであると考えられる。すなわち、会話のなかに生じる沈黙は、話者交替を示す役割を果たしつつ、沈黙による行為の遂行としても機能しているのである。

5. おわりに

本稿では、会話中に生じる沈黙の再分類をもとに、その解釈の多層性について論じた。第一に、主として会話分析による従来の先行研究では、沈黙を話者交替の視点からのみ分類しているため、限定的な分類にとどまる点を論じた。第二に、沈黙に対して、話者交替の視点に加え、発話者と沈黙者による相互行為の視点からとらえることを提案し、分類の再考を行った。新たな分類では、行為としての沈黙であるミュート、およびリンガーを加えることで、従来の分類の補完を試みた。

また従来の沈黙についての研究では、話者交替の視点で沈黙をとらえていたため、沈黙を一義的に解釈する傾向が見られた。しかしながら沈黙の解釈は、発話者と沈黙者による相互行為の視点も踏まえ、考察を行うことにより、多層的にとらえられる場合があると考えられる。すなわち、同一の沈黙であっても、視点が異なることにより、複数の解釈が導き出される可能性をもつ。その点を踏まえ、本稿では、沈黙の多層的な解釈を可能にする枠組みとしての分類を試みた。

本稿では、会話中に生じる沈黙を分類、解釈するための枠組みを提示することしかできなかった。今後は、多層的な解釈が可能である沈黙を人びとはどのように解釈しているのかという点を客観的に示す必要がある。この問題を解決する一方法として、たとえば、複数の人びとが作成した同一会話のトランスクリプトを比較し、沈黙がどのように解釈され記述されているのかを検討することがあげられよう。今後の課題としてぜひ取り組みたいと考えている。

註

- 1 silence には「沈黙」という決まった訳がある一方で、その下位分類である gap や pause、lapse の日本語訳はさまざまあり、いまだに固定された日本語訳がない。Sacks, Shergloff & Jefferson (1974) の翻訳を行った西坂は、pause を「間合い」、gap を「切れ目」、lapse を「中断」と訳している。しかし Levinson (1983) の翻訳を手掛けた安井・奥田は、gap を「空所」、lapse を「時間的経過」としているものの、pause については前後の文脈的状况において「休止」や、「ポーズ」、さらには「沈黙」と

幅広い呼称を用いて呼び分けている。西坂訳、および安井・奥田訳は、すでにある日本語を用いることで、それぞれのもつ沈黙の特徴を表現しようと試みたと思われる。だが、既存の日本語を用いたことにより、彼らの訳では、本来の語がもつ意味を十分に表現できていないと考えられる。そのため本稿では、あえて既存の日本語訳を使用せず、カタカナでそれぞれの沈黙を示すことにした。

- 2 Walker (1985) は、二者間の会話に見られる沈黙を、心理学の視点から 2 種類に分類をした。一つは「インターン・ポーズ (inturn pause)」であり、同一話者によるターンの継続中に見られる沈黙をさす (Walker, 1985, p.61)。これは、Sacks, Schegloff & Jefferson (1974) の分類でいう、ポーズと対応するといえる。
- 3 Walker (1985) による分類において、前後の発話者のターンを明確に区切る沈黙は、「スイッチング・ポーズ (switching pause)」と呼ばれる (p.61)。スイッチング・ポーズは、話し手のターンと聞き手のターンのあいだに生じるため、Sacks, Schegloff & Jefferson (1974) のギャップと同義であると考えられる。
- 4 本スクリプトは、引用元のスクリプトに一部、修正を加えた。Sacks, Schegloff & Jefferson (1974) によるスクリプトの 3 行目には、“((pause))”と表記されている。だが Sacks, Schegloff & Jefferson (1974) の翻訳を行った西坂は、訳注にて当該箇所の表記が誤りであると指摘し、正確には“((gap))”であると述べている。本稿では、西坂による指摘に従い、“((gap))”と記すことにした。
- 5 Goffman (1967) は、会話参加者は相互行為のなかでこれ以上、何も言うことがなくなった際に生じる沈黙のことを「無言の時間 (lull)」と呼んでいる (p.36)。これは Sacks, Schegloff & Jefferson (1974) が提示するラプスの概念と同じ意味をもつと考えられる。
- 6 なお、ラプスに続く 7 行目以降では、新たな話題のもとで会話が再び進行している。ラプスの生じるまでの 1-5 行目では、車を運転するかどうかの話題が展開されている。だがラプスが起こったあとのやり取りでは、話題が靴に関するものへと移行している。これはラプスが生じ、それまで続いていた会話のやり取りが一度、途切れたことにより、会話を継続するために話題の変更が起きたと推察される。Sacks, Schegloff & Jefferson (1974) に掲載されている他のラプスの事例も同様に、ラプスが生じた前後で話題の変更が観察される。この点については、今後の研究課題となるだろう。
- 7 次話者を選択するための技法には、名前や敬称を呼ぶといった言語的な表現だけでなく、指をさすや視線を送る、イントネーションを変化させるなどの非言語的な行為、また隣接ペアーをはじめとする発話連鎖も含まれる (Sacks, Schegloff & Jefferson, 1974, pp.716-720)。
- 8 沈黙は発話をとまらなわらない行為であるため、言語行為ではなく、「コミュニケーション行為 (communicative act)」と呼ぶ研究者もいる (e.g. Saville-Troike, 1985)。
- 9 だがじっさいには、沈黙は発話の不在ゆえに言語行為論の枠組みで、その意味を解釈することはできない。沈黙は、コンテクストのなかで意味づけがなされ、解釈されていく行為であるため、「語用実践行為 (pragmatic act)」としてとらえて分析、考察を行う必要があるだろう (Mey, 2001)。
- 10 このように意図的に行われたわけではない沈黙は、「非意図的沈黙 (unintentional silence)」として扱われる (Kurzon, 1998)。
- 11 本稿では、Sacks, Schegloff & Jefferson (1974) が考案したトランスクリプト記号を使用し、会話の記述を行った。トランスクリプト中に見られる記号とその意味は、下記のとおりである。
 - // 複数の発話参加者の発する音声の重なり始めの時点を示す。角括弧 () と同義。
 - [] 複数の発話参加者の発する音声の重なり始め ([) と終わり (]) の時点を示す。
 - () 聞き取り不可能な箇所は、() で示される。() の長さは、聞き取り不可能な音声の長さに対応。
 - (m.n) 音声途絶えている秒数を () 内に示す。
 - (.) 0.2 秒以下の短い間合いを示す。
 - 言葉 :: 直前の音が延ばされていることは、コロンで示す。コロンの数は、音の長さに対応。
 - 言 - 言葉が不完全なまま途切れている
 - h 呼気音は h で表す。h の数は、それぞれの音の長さに対応。
 - 言 (h) 笑いながら発話が生じられるとき、呼気を伴う音のあとに (h) を挟むことで示される。
 - 言葉 音の強さは、下線によって示される。
 - . 語尾の音が下がり、区切りがついたことを示す。
 - , 音が少し下がって弾みがついていることを示す。
 - ? 語尾の音が上がっていることを示す。
 - (()) 発言の要約や、その他の注記は二重括弧で囲まれる。
 - トランスクリプト中で、注目する箇所を示す。

- 12 ただし4行目のBの発言からわかることは、仮に3行目がミュートであったとしても、その意図がBによる不同意であったかどうかは、不明だということである。

参考文献

- Brown, G. & Yule, G. (1983). *Discourse analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Goffman, E. (1967). *Interaction ritual: Essays on face-to-face behavior*. Garden City, NY: Doubleday.
- Jaworski, A. (1993). *The power of silence: Social and pragmatic perspectives*. Newbury Park, CA: Sage.
- Jaworski, A. (1997). *Silence: Interdisciplinary perspectives*. New York: Mouton de Gruyter.
- Kurzon, D. (1998). *Discourse of silence*. Philadelphia: John Benjamins.
- Levinson, S. C. (1983). *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Mey, J. L. (2001). *Pragmatics: An introduction* (2nd ed.). Cambridge: Blackwell.
- Nakane, I. (2007). *Silence in intercultural communication*. Amsterdam: John Benjamins.
- Sacks, H., Schegloff, E. A., & Jefferson, G. (1974). A simplest systematic for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, 50 (4), 696-735.
- Savielle-Troike, M. (1985). The place of silence in an integrated theory of communication. In D. Tannen, & M. Savielle-Troike (Eds.), *Perspectives on silence* (pp. 3-18). Norwood, NJ: Ablex.
- 杉藤美代子 (1991). 「談話分析・発話とポーズ」『日本語学』第10巻, 19-30頁.
- Verschueren, J. (1985). *What people say they do with words: Prolegomena to an empirical-conceptual approach to linguistic action*. Norwood, NJ: Ablex.
- Walker, A. G. (1985). The two faces of silence: The effect of witness hesitancy on lawyers' impressions. In D. Tannen, & M. Savielle-Troike (Eds.), *Perspectives on silence* (pp. 55-75). Norwood, NJ: Ablex.
- 山田富秋 (1999). 「会話分析を始めよう」好井裕明・山田富秋・西阪仰 (編)『会話分析への招待』(1-35頁). 世界思想社.